



俳句を広めた人

遠藤 梧逸

遠藤梧逸は、前沢が生んだ俳人である。全国に梧逸句碑が三十三基、その内前沢区内に九基ある。前沢区が「俳句の里」として知られているのも、梧逸の存在が大きいと言える。

梧逸は、一八九三年（明治二十六年）十二月三十日、前沢町三日町の町医者遠藤精の四男として生まれた。本名「遠藤後一」。

後一は、太郎ヶ沢で水車精米を営む遠藤のところで育った。さらに、遠藤本家の、養子になった。家督を継ぐことになり、当時としては秀才で、なおかつお金持ちのほかは進学できなかった中学への道が開けた。そして、前沢尋常高等小学校、旧制県立一関中学校と進学することになった。実の母と一緒に暮らせない、兄弟との関係もいささか微妙な家庭環境が、俳人・後一の感受性を豊かにしたのかもしれない。

後一は大学を目指したが、学費がなかった。そこで、代用教員になった。当時は、旧制中学卒は代用教員の口がふんだんにあり、

そこで蓄えたお金が後の進学資金になった。旧制の仙台第二高等学校を経て、一九二一年（大正十年）東京帝国大学（法学部独法科）を卒業した。その後、ドイツ、アメリカに留学する。帰国後、通信省に入る。そして各地逓信省郵務局長・東北配電社長となった。一九三四年（昭和九年）、富安風生との出会いにより、俳句の道に入った。一九四一年（昭和十六年）、四八歳で郵務局長を退職する。

当時、日本は、戦争への道をひた走っていた。

後一は退職後、三井軽金属常務をへて、東北配電（現・東北電力）に入ったのは昭和二十年三月。まもなく終戦を迎えたが、翌年には社長に就任した。役人としても実業家としてもほぼ頂点を極めたのである。明治人の夢として立身出世したといっていいでしよう。

一九三五年（昭和十年）、高浜虚子の門人になり「梧逸」を号とし、ホトトギス会で初入選した。

一九五一年（昭和二十六年）、「仙台ホトトギス会」を「みちのく」と改め、農村俳句・台所俳句を提唱して初代主宰となった。町内の句会をはじめとし全国の多くの人々に俳句を指導した。

一九六一年（昭和三十六年）、第一句集『六十前後』を出版した。翌年には、社団法人・俳人協会設立とともに監事に就任し、後に

名誉会員となった。

一九六四年（昭和三十九年）、在京前沢町友会の創立とともに、初代会長に就任した。

一九七〇年（昭和四十五年）、第二句集『梧逸句抄』『仙台仲間』を出版した。「みちのく」創刊二十周年と梧逸七十七回目の誕生日（喜寿）、妻の七十回目の誕生日（古希）、五十回目の結婚記念などの祝賀行事の一つとして、企画された。『梧逸句抄』は昭和十年から三十九年にいたる三十年間に、富安風生先生の選に入った約三千句から一割の三百句を自選したものであり、『仙台仲間』は、二十年間に「みちのく」誌上で語り合ったことを要約したものがある。さらに『一卷』は、句作を共にしながら苦労したことを取り纏わず、そのまま書き記したものである。『雑詠鑑賞』は「みちのく」誌にとりあげた鑑賞句二千四、五百句の中から、二百十一句を抜いたものである。

一九七二年（昭和四十七年）、第三句集『帰家穩座』を出版した。彼の三部作の一つである。昭和三十五年から四十四年までの十年間に活字化にされた約三千句の中から、喜寿の七十七歳に肖って七百七十句を自選したものである。

一九七四年（昭和四十九年）から主宰した「春郊」は、俳壇にそ

の名を知られた。俳人としては遅咲きだったようである。

一九七七年（昭和五十二年）、前沢町二人目の名誉町民となった。一九八一年（昭和五十六年）、米寿記念『私の勉強机』を出版した。一九八六年（昭和六十一年）、「みちのく」主宰を原田青児氏に譲り、名誉主宰となった。

一九八九年（平成元年）、十二月七日心不全のため、九五歳で亡くなった。名誉町民である師を偲び、翌年から師の命日に「梧逸忌全国俳句大会」が開催され、数千もの句が寄せられている。

『仙台仲間』―序に代えて―より

「農民の間に多く遺っている共通情緒（農民の多数の心の底にある助けあいの精神）から生まれる挨拶の情を我々の俳句の情としたいと思う。本意は、同じ風土に生を享けたもの同志の「よろこび合い」「いたわり合い」の言葉を我々の俳句としたいということに他ならない。（梧逸）」

この言葉からも、俳人梧逸の日本人の情（心）に対する強い思いがうかがわれる。

【前沢の句碑】

- みちのくの町暗くして山焼くる【お物見公園】
- 姓の子ら農を守りぬく地虫出づ【本杉】
- 桜の実踏めば幼き日の甦る【西岩寺】
- 呼びとめて聞こえぬらしく花の道【靈桃寺】
- 兄弟や冬寒き夜はさくら肉【靈桃寺】
- 号令をかけてもみたき葱坊主【白鳥分館】
- 枯菊や洗ひし筆を軒に吊り【靈桃寺】
- 稲架立ちて夜は駅の灯のなつかしく【ふれあいセンター】
- 蕨採る大北上を目の下に【束稲山の中腹】

*参考文献

- 『社会科副読本「わたしたちの奥州市」』
- 『二十世紀の記憶 忘れ得ぬ人々』
- 『仙台仲間』

胆江日日新聞社

遠藤梧逸 著



俳句の庵

